

2003年度第4回物学研究会レポート

「スロー・アーキテクチャーと東京」

隈 研吾氏  
(建築家)

2003年7月23日



BUTSU GAKU  
物学研究会  
SOCIETY OF RESEARCH & DESIGN

**第4回 物学研究会レポート**

2003年7月23日

汐留、六本木ヒルズ、旧防衛庁跡地（六本木）、品川駅東口などなど、大手ディベロパー主導の大規模再開発プロジェクトが続いています。このような状況の中で、日本の建築家たちは、日本の風景や都市デザインの未来をどのように展望し、創造していくのだろうか……という問いかけがあります。今回の物学研究会は建築家の隈研吾氏を講師にお招きし、「スロー・アーキテクチャーと東京」というテーマでお話をいただきました。以下はそのサマリーです。

**「スロー・アーキテクチャーと東京」****隈 研吾氏 （建築家）**

隈 研吾氏

**場所性と建築**

皆さんこんばんは。本日は「東京と建築」というテーマをいただいておりますが、私の建築は「場所」が一番重要なテーマとなっています。これは「場所」をどう読むかということで、その延長線で「東京」についても多少は触れることになると思います。

建築と場所を考えると、大きく2つのアプローチがあるように思います。一つは、どんな場所であろうとも同一の強烈なメッセージを発するような、基本的にはどこでも同じ建物を設計するというやり方。私はこれをマクドナルド型と呼んでいます。世界中どこに行っても同じハンバーガーを提供するもので、今盛んに言われている「ブランド」はこのような戦略をとります。ブランディングは同じクオリティを世界中で提供していくことが重要です。一方は、建築の面白さは「場所」をどう読み解くか、場所によって一つ一つ違った回答としての建築を作っていくというものです。私はこちらです。けれども、「場所を読む」といっても読み取り方は様々です。例えば、地形、気候、風土、文化などの要因が絡み合っています。さらに場所固有の「物質性」、例えば、木材を使うにしても北海道であれば北海道の、九州であれば九州の木を使う。場所特有の物質を建築に置き換えていくことで、建築がさらにその場所と密接な関係を構築できるのではないかと考えています。以下、幾つか例をあげながらご説明します。

## 額縁としての建築

### 亀老山展望台（瀬戸内海、大島）

これは山の上に瀬戸内海を見渡す展望台を作るというプロジェクトでした。すでに山頂を切り取った公園があって、そのまん中にシンボルとなるようなものを作ってほしいという依頼でした。最初は依頼通りいろいろなモニュメントの模型を作って検討していましたが、ある日突然どうしてここにモニュメントを建てなければならないのか、いっそのこと削り採られてしまった山を復元できないだろうかと思いつきました。切り取った部分に再び土を盛って、その中に新たな構造物として亀裂を作る。訪問者は公園から引き続いてこの亀裂の中を歩きます。展望台のはずなのになぜこんな地下道のようなところ歩かなければならないのだろうかという疑問を抱きながらも、見上げると亀裂から空をみることができます。そして奥にある大階段を登り切ると、眼下には瀬戸内海の風景が広がっているというわけです。写真で撮ってもただの山にしか見えない展望台ですが、この場所にしか存在し得ない建築でもあります。

### 運河資料館（石巻）

これも見えない建築です。かつて北上運河であった河川の際に資料館を作りました。実は私に依頼がある前に、すでにフランスの古城のような建築案が決まっていた。たまたまシンポジウムでその設計を見せられて、現在の河川の景観を壊してしまうお勧めできない案ですねと発言したところ、では隈さんがやってくださいよということになりました。

北上運河は江戸にお米を運ぶための重要な運河でした。現在運河沿いは散歩道になっていて地元の人たちが散歩を楽しんでいます。私のプランは、土を盛った中にトンネルを掘るように建築を作るというもので、トンネル部分が資料館です。訪問者は運河沿いを散歩して、まるで寄り道をする感覚で地下に向かって坂を下っていく。するとそこが資料館というわけです。

通常、美術館や資料館などのプロジェクトでは建築家が展示デザインを行うことはありませんが、建物と内部空間のイメージを統一したかったので展示のディレクションもさせてもらいました。展示はコンピュータゲームの手法で、「運河」をテーマとしたソフトを友人に開発してもらいました。家具はステンレスパイプを使ってトータルにデザインしました。

運河に面した部分是一片の巨大なガラス面によって外と内の境界を作っています。そのため資料館の内部から運河側を眺めると、まるで額縁に納まった美しい風景画をみているような感覚になります。私自身はこのように物性よりも額縁のような性格が大切なのではないかと考えています。この場所以外には存在し得ないそんな建築になっています。

### 水ノガラス（熱海）

日本文化を海外に紹介して名高いブルーノ・タウトは、1933年に国内に唯一の建築を残しました。熱海の住宅です。タウトは桂離宮を見て、日本建築の本質は物性ではなく額縁性にあり、庭と人を繋ぐものだと言いました。この熱海の建物は和風と洋風が混じった不思議な家で、当時は折衷的建築だと評判が良くなかったのですが、今訪れてみるととても面白い建築です。つまり彼の興味が建築の形よりも、人がここでどういう体験ができるのか、環境とどう関わり合えるのか、そういうことがデザインの中にあることが理解できます。1933年当時といえば、欧米ではコルビジェやミースが

活躍している時代で、彼らはまさに形態主義者でした。タウトは日本に来て彼らとは違った新しい建築の次元を見透かしていたように思います。

このタウトの住宅の隣に「水ノガラス」という建物を設計しました。これは水の額縁を通して、前面に広がる太平洋と自分がどのような関係性を持つことができるのかをコンセプトとしています。具体的にはガラスという素材を使って周辺の環境と自分の繋がりをデザインしています。

### **森舞台 / 登米町伝統芸術伝承館（宮城県）**

有名な京都西本願寺の能舞台に限らず、本来、能舞台には共通した精神が宿っているように思います。それは能舞台という建物自体は、その前に広がる砂利を敷き詰めた「白州」という外部空間のための額縁に過ぎないのではないかということです。砂利を敷き詰めた白州という空間は、別の表現を使えば舞台と見所の間には設けられた「穴」であり、ここに精神が宿っていた。ところが近代的な能舞台では「穴」が消滅します。要するに舞台と見所という物性しか存在しなくなりました。このようなことを考えながら宮城県に「森舞台」という能舞台を作りました。ここでは近代能舞台とは逆に舞台や見所を消して、両方に挟まれた「穴」を中心にした空間をデザインしました。街の側から見ると、板を水平に張ったルーバーの向こう側に能空間が透けて見えます。逆にルーバーを通して白州と呼ばれる「穴」空間が街に溶け出していきます。

## **場所性と材料、技術**

### **陽の楽屋（新潟県高柳町）**

ここは萱葺きの住宅が残る美しい田園風景を残した町です。日本中からカメラの愛好家や日曜画家たちがこの美しい風景を求めてやってきます。そこで町が交流センターを作ることにしたのです。交流センターと言っても20坪未満の小さな建物です。私はこの頃から「材料」を強く意識するようになりました。逆に言えば、このプロジェクトでは「材料」以外でできることがなかった。つまりここでは建物の外観は萱葺きを守るしかない。20坪の四角い箱という決まりの中で何ができるのか？

何度か高柳町に通ううちに地元の和紙職人の小林康生さんと知り合い、彼が日本でも有数の職人さんであることを知りました。有名な「久保田」というお酒のラベルは彼によるものです。彼は原料であるコウゾから育てていて、その和紙は繊維が長くて触ってみるだけで肌触りが違います。彼の和紙で建物を包めないかと思いつきました。ところがこの町の自然環境は相当厳しいです。横なぐりの雨も降れば、冬の積雪もすごい。紙が破けないための工夫が必要でした。議論しているうちにこんにゃくと柿渋を塗るのが良いと知り、実験を繰り返しながら和紙貼りの建物を完成させました。また佇まいも重要だと考えて庭も造りましたが、造園という人工的なものではなく、お百姓さんをお願いして稲を建物の際まで植えてもらいました。冬の間はこの土地独特の落とし板で建物を守り、板に開けた穴から雪明りが洩れてきて風情を感じさせてくれます。

### 共同浴場（山形県、銀山温泉）

山形県の山間に14軒の温泉旅館が密集している銀山温泉があります。ここは地形が谷底で土地がないために建物は上に伸びていくしかなく、4階建ての木造建築が連なる風情ある佇まいです。この温泉街のはずれに20坪ほどの共同浴場を作って欲しいという依頼がありました。

私が考えたことは、木製格子が連なる街並みに敬意を払いつつ現代の空気を持ちこみたいということでした。考えた末、建物全体を無窓格子で構成するというのものでした。外側の木と内側のアクリル素材を組み合わせた二重構造の格子をスライドすることによって窓を開閉させ、光や風が透過するというとても繊細なディテールです。このディテールはいつか実現させたかったのですが、雨風が吹きこむので住宅で使うことはできなかったのです。脱衣場もアクリルで多用したので外光が入ってきます。夜間は中の光が透過して外に温泉街に独特に風情を与えています。風呂場は地元で採れる安山岩の一種を使いました。

### 石の美術館（栃木県那須）

那須は高原リゾートのイメージが強いのですが、その東端にかつての奥州街道の宿場町で今はすっかり廃れてしまった芦野という町があります。町を何とか活気づけたいという地元の石屋さんが、JAから古い米倉を買い取って石のギャラリーを作りたいと私に依頼してきました。初めは3棟ある石倉のリニューアルをするという話だったのですが、観光客を引きつけるためには、場所そのものの魅力を高めることが重要だろう、そのためには石倉よりも外部空間つまりランドスケープをきちんとデザインすることが必要なのではないかと考えたのです。石倉はその存在だけで十分力があつたので特に手を加えず、それぞれの倉を廊下でつなぎ、敷地には水盤というランドスケープデザインを施しました。建築の材料はクライアントが石屋さんだったので石に拘りました。渡り廊下のルーバーは普通であればガラスを使うところですが、スライスした石を重ねたり、大理石を6ミリの薄さに切って穴を開けたり、方々で、普通は実現できない手の込んだ施工をしています。こんなディテールは石職人さんと直に話せたからできました。このように自前の石材と職人技術を使いながらのプロジェクトだったので、建築費はかからない代わりに、職人さんの手の開いているときに工事をするので4年もかかってしまいました。こうしたスロー・アーキテクチャーも良いものだと思います。

### 馬頭町広重美術館（栃木県馬頭町）

フランク・ロイド・ライトは安藤広重の浮世絵のコレクターであり、建築的にも大きな影響を受けていました。例えば、浮世絵で良く使われる近景から遠景に至るレイヤー、モノが重なり合っているイメージ。このようにライトは透けるものが重なり合う空間イメージを広重の浮世絵から影響を受けています。私は、広重の浮世絵に多く見られる雨降りの風景、つまり雨を表現する縦線をモチーフにした空間を創りたいと考えました。

馬頭町は八溝杉とい杉材の産地でもあったので、八溝杉を使ったルーバーで広重が描いた縦線のイメージを表現できないかと考えました。けれどもデザインを進めていくうちに、ルーバーだけでなく屋根や壁も杉材で作ろうと思いつき、宇都宮大学の先生にご協力いただいて不燃の杉素材を独自開発しました。無事に建築基準法をクリアして、建物の屋根、壁、ルーバーを全て八溝杉を使い、内部空間は杉材をさらに隣町の烏山で作っている和紙で覆ってしまうという大変手の込んだ仕上げにしました。照明は光ファイバーです。木や和紙の加工といった伝統的な職人技術と光ファイバーのような新

しい技術が融合する中で、新しい空間デザインの可能性があるように思います。

### 竹の住宅（鎌倉、北京郊外）

竹は日本中で簡単に手に入る材料ですが、すぐに割れてしまうという欠陥があるため建築には使えませんでした。しかし私は竹の涼しそうな素材感を生かした建物を作りたいと願っていました。そこで構造設計家と試行錯誤した結果、竹の節を抜いて中に鉄骨を入れてコンクリートを流し込むというシステムを開発したのです。この竹構造を使って鎌倉に住宅を作りました。その後、北京郊外の万里の長城を臨む土地にレジデンスを設計することになり、ここでも竹構造を使いました。

### 豊浦の仏殿（山口県、豊浦）

山口県の日本海に面した豊浦という町に、平安時代の高さ2メートルほどの大仏さまを入れる小さな美術館を作りました。ここでは土を材料にしました。日本で一般的な土塀は木や竹で芯を作ってから土を貼っていきますが、この町には昔から伝わる厚みが50センチ近くある土塀があって、この技術を使ってみることにしました。しかし土塀では建築基準法をクリアできません。地震がきたらひとたまりもありません。そこでコンクリートのフレームと鉄版の組み合わせた複合的な構造体の上に土のブロックを積み上げていくという工法を考えました。

## 東京という場所性

### プラスチックの家（東京、目黒区）

ここからようやく東京のプロジェクトになります。

東京祐天寺近くの写真家の住宅です。初めからコンクリートは使いたくないという施主との同意があり、一度はフェノール樹脂の燃えないプラスチック素材で家を作ろうということになったのです。ところがここでも建築基準法の壁があり、最終的には鉄骨構造にFRPを被せて建物全体が障子みたいに光が透ける住宅になりました。バルコニー、手すり、風呂場、天井も全てFRPです。中にはお茶室に使える裏庭を設け、施主は野点をするんだといっています。存在の希薄さが住宅の密集する東京の環境にとってもマッチしていると思います。

### ぺんたくん（東京、多摩センター）

これはリフォーム会社のショールームですが、天井高が15メートルという巨大空間があり、そこにリフォームの実例として実物サイズの住宅を12軒並べるといふ不思議なプログラムでした。私は建物全体を映像のように見せることができなれないかと思い、ガラスのスキンで建物を覆ってしまうというアイデアを思いつきました。……というのも高度に密集した東京という都市環境においては、建築と映像的なものの境界がすごく曖昧であり、建築の存在感が希薄です。そんな場所に石張りやコンクリートの固まり見たいな建物を持ってきても、逆に偽者っぽくなってしまふ。東京で建物を作るときにはその「希薄性」をどう表現するかがキーではないかと考えるのです。ここではガラスのスキンを被せる。ディテールはガラスの板をMPG工法と呼ばれるステンレスドットで固定し、建物全体がまるで巨大なテレビ画面のようです。

## 梅窓院（東京、青山）

最大のテーマは現代の東京という都市的環境と歴史的建造物としての寺をどう関係づけるかでした。まず思いついたのが屋根でした。神社仏閣の建物といえばまず瓦の巨大な屋根を思い浮かべますが、東京の中心部に大スケールの屋根を持ち込んでしまうとディズニーランドのようになってしまう恐れがあります。そこで瓦の代りに金属板を用いて、存在感は希薄であっても瓦屋根のもつ陰影の表現に拘りました。インテリア空間は一見すると和紙のようにみえますが、ガラスクロスを使っています。

## J R渋谷駅ファサード（東京、渋谷）

渋谷はもっとも東京的な場所といえるのではないのでしょうか。つまり、看板、建築、映像の境界が曖昧で、建築の変貌ぶりが最もはっきりと表明している場所です。このプロジェクトはJ R渋谷駅のハチ公広場に面したファサードです。J Rらしい顔を作って欲しいとの依頼でしたが、荘厳な石の壁を作ったところで周辺の看板や映像に勝てるわけがありません。そこで、他の看板や映像よりもっと希薄な面を作るアイデアを提案しました。それはガラス面にセラミックによって雲をプリントするというものでした。渋谷はその名の通り「谷底」のような場所だし、空くらいしか自然を感じさせる要因はありません。ガラスにプリントされたバーチャルな雲と空に浮ぶリアルな雲が重なり合ったり反射する巨大な不思議な壁を作りたかったのです。雲のプリントは大粒のドットで表現しています。このくらい大きな壁だと大きなタッチで描かないと逆にリアルに見えないそうで、視覚の錯覚の面白さを知ったプロジェクトでした。

実際にこのファサードは広告収入源に活かしたいということで、看板を取り付けました。結果的にはより渋谷らしいデザインになりました。

## LVMHグループの東京本社ビル

このプロジェクトでは表参道の並木がデザインに大きく作用しています。ちょっと離れたところでは安藤忠雄さんが同潤会アパートの建て替えをしていて、コンクリート打ち放しにガラス窓を嵌め込んだいかにも安藤建築らしい建築を建てています。私はもう少し繊細にケヤキ並木に対してレスポンスできないだろうかと考えました。そこで60センチピッチで出が45センチという唐松の集成材のルーバーを作って、カーテンウォール構造で建物を包むことにしました。このルーバーとケヤキ並木が重なって、表参道という環境に微妙な響きをもたらしてくれたら良いなあと考えています。

東京と一言でいっても様々な場所があります。重要なのはそれぞれの場所性をどう読んで、建築の中に取りこんでいくのです。作家性を全面に押しだしたブランド建築に対して、私場所性をゆっくり読み込んだはスローアーキテクチャーを志向したいと考えています。

以上

## 講師略歴

### 隈 研吾 （建築家）

1954年横浜生まれ。1979年東京大学建築学科大学院修了。コロンビア 大学客員研究員を経て、隈研吾建築都市設計事務所主宰。2001年から慶應義塾大学理工学部教授。自然と技術と人間との新しい関係を切り開く建築を提案。

#### 主な作品：

「亀老山展望台」（公共建築賞優秀賞、「JCDデザイン賞'95」文化・公共施設部門最優秀賞受賞）「高知県梶原町地域交流施設」（通産省選定グッドデザイン賞施設部門・新しいなかデザイン賞大賞受賞）「水ノガラス」（アメリカ建築家協会ベネディクタス賞受賞）「森舞台／宮城県登米町伝統芸能伝承館」（日本建築学会賞受賞）「馬頭町広重美術館」（村野藤吾賞、林野庁長官賞受賞）「石の美術館」（インターナショナル・ストーン・アキテチャー・アワード受賞）。2002年フィンランドより「スピリット・オブ・ネーチャー 国際木の建築賞」を受賞

#### 著書：

『反オブジェクト』（筑摩書房）『新・建築入門』（ちくま新書）『建築的欲望の終焉』（新曜社）他。

2003年度第4回物学研究会レポート  
「スロー・アーキテクチャーと東京」

隈 研吾氏  
(建築家)

---

写真・図版提供

; 物学研究会事務局

編集=物学研究会事務局

文責=関 康子

[物学研究会レポート]に記載の全てのブランド名および  
商品名、会社名は、各社・各所有者の登録商標または商標です。  
[物学研究会レポート]に収録されている全てのコンテンツの  
無断転載を禁じます。